かたりべ 81

豊島区立郷土資料館だより

アトリエ村模型に猫がいた！

一九八四（昭和五九）年の開館以来、「長崎アトリエ村」コーナーのアトリエ住宅の模型は、郷土資料館常設展の目玉のひとつとなっており、ご好評をいただいております。

この模型は、一〇分の一の縮尺で作られていて、模型全体の外観と構造は、長崎二丁目にあった「さくらが丘パルテノン」と呼ばれて、麻生三郎（あそうさぶろう）、榑松正利（くれまつまさとし）、丸木位里（まるきいり）・俊（としお）夫妻、長沢節（ながさわせつ）、峯孝（みねたかし）氏らが住んだアトリエ村をもとにして製作されましたが、部屋の内部はつつじヶ丘アトリエ村（千早二丁目）にあった三坂耿一郎氏のアトリエをモデルにして作られました。

模型側面のアトリエの内部がのぞける窓の、となりのガラスに顔を近づけると、アトリエ住宅に囲まれた路地が見えます。その奥に見える風景は、当時のアトリエ村から池袋方面を眺めた風景を、当時の人々の証言などから描いたものなのです。ですから、この路地は東西に走っていた路地であり、アトリエ住宅の象徴である天窓は北側を向いていたことがわかります。

奥の風景から視線を路地に落としてみると、一匹の猫がこちらをうかがっているのをご存じですか（写真○印）。この模型を何度もご覧になっても気が付かれた方は少ないのではないでしょうか。この猫は、この模型ジオラマに登場する唯一の動物です。

今回の企画展「池袋モンパルナスを生きた人々」では、初公開となる作品・資料も含めて約一〇〇点を展示します。これらの美術品や資料の数々もさることながら、あらためて、このアトリエ村模型をじっくり見て、新しい発見をしていただければ幸いです。（伊藤）

★新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館開催記念企画展★

◆「池袋モンパルナスを生きた人々」◆

◇会　　期：二〇〇六年三月一六日（木）～五月一四日（日）

◇休　館　日：毎週月曜日、四月一六日・二九日・五月三日～五日

◇開館時間：午前九時から午後五時まで（入館は四時三〇分まで）

今、資料館のあり方を考える

―郷土資料館運営委員会からの要望書―

一九八四年六月、当館は開館しました。それ以来、区民の方から資料の寄贈を受け、調査し、その成果を特別展や企画展で紹介してまいりました。また、歴史講座・地域史講座・博物館講座といった講座等を、特定のテーマに基づいた豊島区の歴史をさまざまな視点から知っていただく機会として継続して開催しています。

しかし、開館後二〇年を経た今、貴重な資料が多く集まるとともに、さまざまな目的と関心から区民共有の財産として、の資料を利用する人に対し、決して十分に期待に添える状態ではありません。

ところで、当館には、学識経験者・郷土資料館友の会代表・区民代表・小中学校教員代表で組織される"郷土資料館運営委員会"があります。これは、設置要綱にもとづき、当館の適正な運営をはかるために基本的な運営事項について審議し、助言を得るために設置されているもので、年に三回開催しています。

このたび、当館の現状を把握していただき、利用される方の声を反映する意味から、左の要望書の提出を受けましたので掲載いたします。今後の資料館のあり方について、みなさまとともに考えていきたいと思います。

（福岡）

高野区長（左）に要望書を提出する大島委員長（10月7日）

2005年10月7日

豊島区長　高野之夫　様

豊島区立郷土資料館運営委員会
委員長　大島幸夫
委員　高埜利彦
委員　中村ひろ子
委員　小池陸子
委員　木川るり子
委員　榎本善繁
委員　千馬英雄
委員　松岡研一

今後の郷土資料館のあり方について

私たちが運営委員となっている豊島区立郷土資料館は、1984年6月に開館して以来、区民の歴史や暮らしにかかわる貴重な資料を収集・保存し、調査・研究を進めてきました。その成果は、数多い展示や講座の開催、刊行物の発刊などを通じ、区民が共有するところともなっています。

例えば、82年に豊島区が行った非核都市宣言を踏まえ、戦時下の集団学童疎開についての実態解明を行い、あるいは、染井の植木屋に関する継続的な調査・研究と並行して、当地がソメイヨシノの発祥地であることの周知に努めるなどしてきました。

分館の雑司が谷旧宣教師館においても、文化財保護の重要性を多くの区民とともに考える活動を行い、本分館あわせて開催した展示会は50回、講座はのべ500回を超えています。

こうした郷土資料館の活動は、館利用者や学会等から、豊島区の新たな歴史像を次々と提示している、と高く評価され、豊島区の文化創造の広がりに大いに寄与していると考えます。今後さらに、文化創造都市豊島区の歴史と伝統を確認・発見する調査・研究活動を担う郷土資料館の存在意義は、ますます深まります。

しかし、開館後20年が経過し、施設の老朽が目立っています。機能にも不具合が生じてきています。例えば、展示室、収蔵庫内の壁面は経年劣化が著しく、空調機器類の相次ぐ故障と重なって、カビが生じるなど、区民からの貴重な寄贈資料に悪影響を与えかねない事態となっています。また、資料の収蔵場所が区内外の8か所に分散しているため、整理作業をするにも効率はきわめて低く、利用者のニーズに速やかな対応が出来ない状態です。

さらに、常設展示室の復元模型やパネル類は、開館当時のままで、一度も手が加えられていません。このため復元模型の一部にはゆがみが生じています。パネル類の色あせも目立っています。

このような現状に対しては、数年前から、郷土資料館の全面的なリニューアルを求める来館者の声が多く寄せられています。

ついては、2005年4月から実施されている文化政策担当の区長部局一元化を契機とし、高野区長としても豊島区が行う文化政策の中に郷土資料館活動を、より積極的に位置づけてほしいと考えます。そのうえで、館の文化事業をいっそう充実させていくために館の移築ないしは全面的リニューアル、事業関係予算の増額を早急に実現していただきたい。とりわけ、資料収蔵庫の効率的配置は急務です。

以上、運営委員の総意として強く要望するものです。

《紹介》詩人・吉原幸子さん

戦争のなか　11歳の日記

（つづき）

長崎第二国民学校四年生、吉原幸子さんの一九四二（昭和一七）年の日記の続きを見ていきます。

突然の米軍空襲にびっくりさせられますが、日記にあるのは、戦争のことばかりではありません。学校のようす、友だちのこと、遊びなどもくわしく出てきます。学校の勉強も一生懸命にやって、良い成績をとっているのですが、遊びも竹馬やすもうなど、けっこう活発でした。そのあたりを少し。

〈五月二五日の日記〉

家へ帰ってお習字をした。明後日に「青田に鳴く蛙」の「青田に」を学校で習ふのだ。勉強がすんでから外へ出て男の子達とすもふをとった。このへんはわりに女と遊んでくれる男の子が多い。いやな人も居るだらうが私には丁度い、。谷島さんにもよささうだ。

〈五月二六日の日記〉

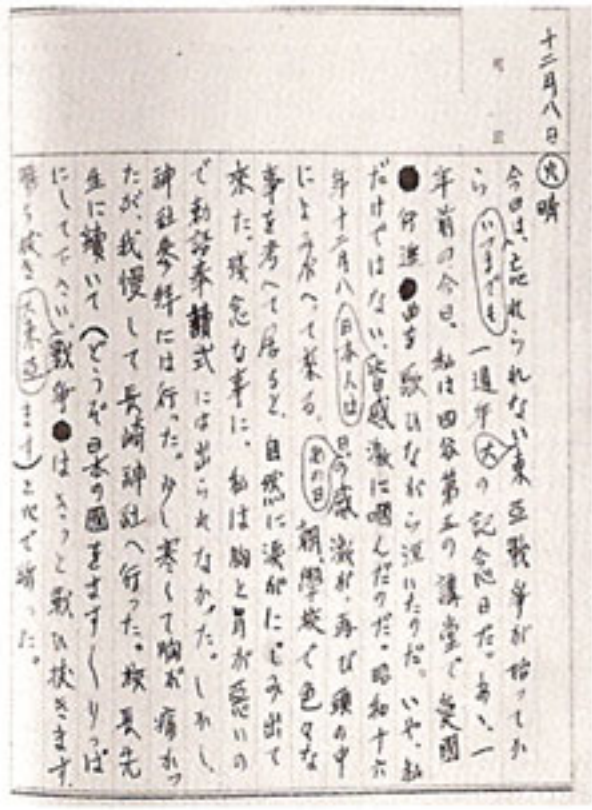
今日は工作があるのでこの前作った箱を持って行った。工作をする前のお休み時間にそれを出し、「何を作るのかな」と思って居たら……皆の作った箱を「これは誰さんのです」「これは何々さんのです」と名前を言って、組の人に見せただけだった。

家へ帰って算数の宿題をしてから運針を三本やり、外へ出た。のぶをちゃんや金子さんや谷島さんがテニスコートに居たので一緒にすもふをとったり、かくれんぼをしたりした。暫くして家へ入った。

〈六月一〇日の日記〉

学校から帰って算数と習字をした。今日学校で「手紙返事安心」の前の三字を習ったので家でも「手紙返手紙返」と書いた。理科を少ししておもてへ出た。山縣さんや谷島さんと少し竹馬に乗ったりして遊び、今度は三人で家へ入ってかくれんぼをした。私がおし入にかくれたらお母さんが「ふとんがくしゃくしゃになってしまふし、そんな事されたら困るわね」とおっしゃった。幸子さんは胃腸が弱かったようで、学校を続いて休むこともありました。それに負けないように一層がんばっている様子もうかがえます。相変わらず、映画はよく見に行っていて、戦争ものがだんだん多くなりますが、それだけではなく、外国の作品も見ています。家族旅行やハイキング、食堂などでの食事もしています。そうしたことへの制限もまだ、それほどではなかったのでしょう。しかし、翌年から一九四四年の集団疎開に行く頃にかけて、映画も外食も少なくなっていきます。

そして、四二年でも、戦地や病院の兵隊への慰問文・慰問品送りが、たびたび、行なわれていることが日記からわかります。また、「満州国」や日本の占領地の子どもへの「親善画」を書いたりしています。少年団や子ども常会（隣組の常会にならったもの）の行事も増えていきました。


十二月八日　火曜
今日は、忘れられない東亜戦争が始ってから（いつまでも）一週年（太）の記念日だ。あゝ、一年前の今日、私は四谷第五の講堂で愛国行進曲を歌ひながら泣いたのだ。いや、私だけではない。皆感激に咽んだのだ。昭和十六年十二月八（日本人は）日の（あの日）朝、学校で色々な事を考へて居ると、自然に涙がにじみ出て来た。残念な事に、私は胸と目が悪いので勅語奉読式には出られなかった。しかし、神社参拝には行った。少し寒くて胸が痛かったが、我慢して長崎神社へ行った。校長先生に続いて（どうぞ日本の国をますますしっかりと）にして下さい。戦争（は）きっと勝ち抜きます（太東亞）まで）と心で祈った。

1942（昭和17）年12月８日の日記。

〈一二月八日の日記〉には次のように書かれています。戦争は少女の心をしっかりとらえていたのです。

今日はいつまでも忘れられない大東亜戦争が始ってから一周年の記念日だ。あゝ、一年前の今日、私は四谷第五の講堂で愛国行進曲を歌ひながら泣いたのだ。いや、私だけではない。日本人は皆感激に咽んだのだ。昭和十六年十二月八日の、あの日の感激が、再び頭の中でよみがへって来る。……少し寒くて胸が痛かったが、我慢して長崎神社へ行った。……（どうぞ日本の国をますく　りっぱにして下さい。大東亜戦争はきっと戦ひ抜きます、勝ち抜きます）と心で祈った。（完）

吉原幸子さんは詩人。長崎第二国民学校（現・要小学校）および都立第十高等女学校（戦後は豊島高校に）卒業。二〇〇二年一一月に亡くなられた。主な詩集に『幼年連祷』、『オンディーヌ』、『発光』などがある。山形での集団疎開中およびその前後の日記は、当館発行『豊島の集団学童疎開資料集(3)』（一七〇〇円）に掲載されている。

（あおき）

豊島をさぐる その14

動物供養塔 ―様々な供養のかたち

近年世界遺産に登録された高野山を訪れると、みどころである奥の院への道のりで広大な墓所を通り過ぎます。ここは歴史上の著名人の墓所が数々あることで有名ですが、それらに混じって目を引くのが動物の供養塔です。これはペットのお墓とは性格が異なるもので、人間のために犠牲になった動物を広く供養するものです。作ったのは動物を扱う仕事をする企業や団体がほとんどで、例えば、動物実験で犠牲となった動物の供養塔（図1）などがあります。医療の発展のため、人間の生命のために貢献して犠牲となった動物に対して冥福を祈るものです。ここまでは人類共通といえる供養といえますが、さらには駆除したシロアリを供養する碑（図2）というのまであります。害虫として認識されている生物に対しても、犠牲になったという意味で等しく慰霊する、というもので、これは日本人に特有な姿勢であるといわれています。人間と動物の間に決定的な身分差をおいている西洋人に対して、日本人は時として人間と同じレベルで動物を扱うことがあるからです。

図1　実験動物供養塔（高野山）

図2　シロアリ供養塔（高野山）

ところで、豊島区内にもこのような動物供養塔はみることができます。かつて豊島区内には明治～戦後あたりまで牧場が点在していたのですが、その乳牛が伝染病で多数死んだ時に建てられた明治時代の供養塔が南大塚の東福寺（南大塚一―二六―一〇）に現在でも残っています（当館特別展図録『ミルク色の残像―東京の牧場展―』一九九〇年、六一頁参照）。

また、西巣鴨の妙行寺（西巣鴨四―八―二八）には、昭和三十五（一九六〇）年に建てられたうなぎ供養塔があります（図3）。著名な彫刻家・高村光雲による原型に基づいて鋳造された優美な観音像をいただきに載せた美しい塔です。これは東京鰻蒲焼商組合と東京淡水魚組合が施主となって建立したもので、平たく言えばうなぎ屋さんが建てたものです。このうなぎ供養塔の背後には「為犠牲食用うなぎ之群霊発菩提心之塔也」の文字に続いて発願者の名前が記された卒塔婆が立てられています。「うなぎ？」と思われる方もいるかもしれませんが、日本の各地には、かつおぶし業者の立てた「鰹塚」があったり、ウニの名産地でウニ供養をしたりする、といったことが行われています。高野山のシロアリの例と同じく、業者は自分たちの生計のために犠牲になった動物を供養しているのです。筆者はこの供養塔を参詣した前日にうなぎの蒲焼を夕食で食べましたので、消費者の側としてもことさらに考えさせられました。役にたってくれているものに対しては誰であろうと、何であろうと、感謝の気持ちを表わす、という当たり前のことを改めて意識させられました。

（藤岡）

図3　うなぎ供養塔（妙行寺）

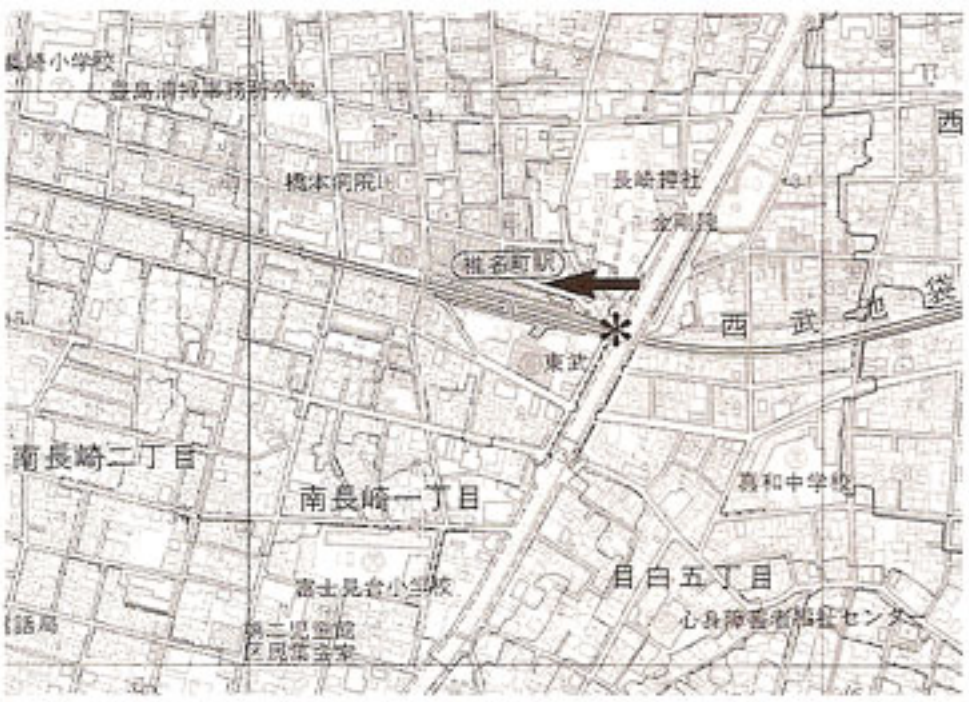
セピア色の記憶

第15回　「椎名町」にまつわる話エトセトラ

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和四〇年代と現在（二〇〇六年三月四日）の西武池袋線椎名町駅舎の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、⬇印は撮影方向を示しています。旧式の公衆電話ボックス（丹頂型ボックス）や郵便ポストに懐かしさを感じる方もいることでしょう。

椎名町駅は、武蔵野鉄道（現西武池袋線）の始発池袋駅の次の駅として大正一三年（一九二四）六月に設置されました。この年の乗降客数は六万八〇〇〇人ほどでしたが、豊島区が成立した昭和七年（一九三二）になると年間一六〇万人程度、高度経済成長期の昭和四〇年度になると一七〇〇万人近くと、物凄い勢いで増加していきます。これは駅周辺の宅地開発が進み、利用者が激増したためと考えられます。

ちなみに、平成一四年度の乗降客数は約七二〇万人であり、ピーク時に比べると大幅に減少していますが、これは豊島区の人口が全体として減少傾向にあることと、この間に営団（現東京）地下鉄有楽町線や都営地下鉄大江戸線が開通して駅の数が増え、利用者がそれぞれ最寄りの駅へ分散されたことなどがその理由としてあげられるでしょう。



さて、椎名町とは、もともと現在の目白通りと山手通りが交差するあたりに開けた町場（まちば）でした。一九世紀前半に成立した紀行文「嘉陵紀行（かりょうきこう）」には、椎名町の入口に慶徳屋（けいとくや）という立派な穀物商がいることや、同町の商家には貧しい者は見当たらないなどと記されています。著者である（徳川家御三卿（ごさんきょう）の一つ）清水家の用人（ようにん）村尾嘉陵は、その町並の様子からこの町を"富裕な町"ととらえたようです。

明治42年（1909）1万分1地形図（部分）

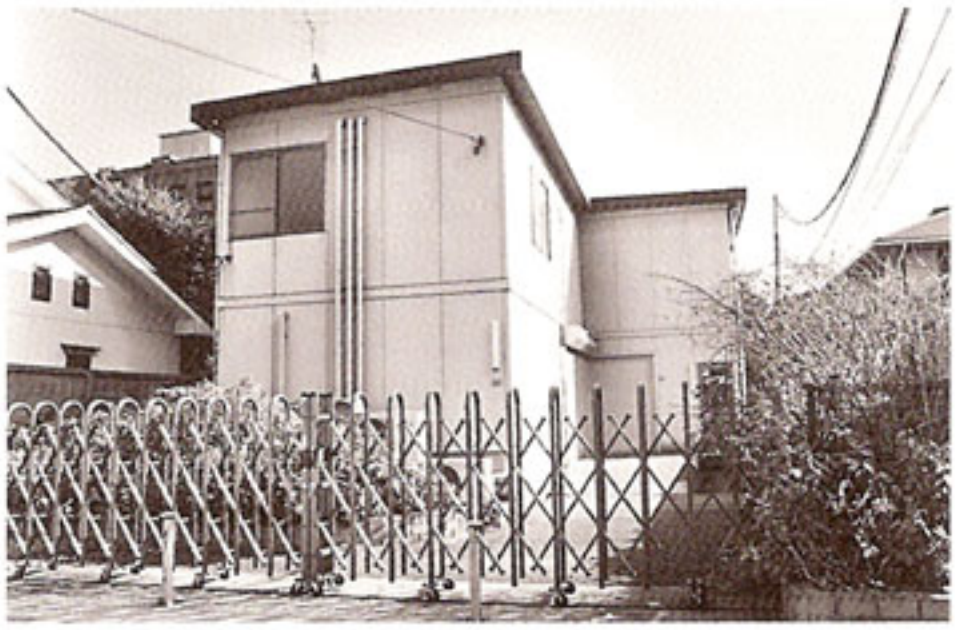
明治時代以降も椎名町の賑わいは続いたようで、商家が軒を連ねていた様子を古地図上でも確認できます（右地図参照）。そして、昭和一四年から三九年にかけては、豊島区内の正式な町名として椎名町一～八丁目（おおよそ現目白四・五丁目と南長崎一～六丁目地域）が使用されましたが、昭和三十九年からの住居表示の実施に伴い、町名としての「椎名町」は消えていきました。

（秋山）

郷土資料館からのお知らせ

"文化財資料調査室"が閉鎖！

郷土資料館の南側の隣地に「文化財資料調査室」という建物があります。一九九五年から使用してきた建物ですが、資料館の展示室（勤労福祉会館七階）は知っていても、この建物を知る人は少ないかもしれません。



お世話になりました。なごりおしいけど…。

建物は文化財係と共用していますが、当館では、新しく受けた資料をまずここに搬入し、荷解きをします。そして、資料のデータをとるために、洗浄・実測・文字の解読等の調査をし、資料番号を付けます。つまり、資料を展示室に移動させるまでに行う作業のための重要な場所なのです。また、資料を撮影するための撮影室があり、そこでは、『展示図録』に掲載する写真を撮ります。さらに、展示替えの際に、区の内外の収蔵施設から運搬してくる資料の一時的な置場としても活用しています。

また、学芸員だけではなく、さまざまな資料を整理・調査する調査員も同所で作業をすすめていますし、博物館実習生の実習拠点としても活用しています。その他、各地の博物館から受け入れた書籍類を所蔵していますので、閲覧希望者には閲覧していただくこともあります。

しかし、こうした資料館の機能を果たしてきた文化財資料調査室は、区の方針により、本年三月末をもって閉鎖となり、その機能は、旧第十中学校（千早四丁目）の一部に移ることとなりました。七階のフロアーだけでは狭いため作業が沈滞し、それを解消するためにできた施設がなくなります。これによって資料館の活動が後退することのないようにと考えますが、一時の停滞は御容赦下さい。では、今後ともよろしくお願いいたします。

「出前講座」にヒッパリダコ？

区内で活動しているグループや団体の学習会に区の職員が出向き、求められる内容の講義をするという出前講座が広く実施されています。当館では、学芸員が地域の歴史を内容とした講義を、学校や各施設からよく依頼されています。ここ数年間では、一年間に一〇回を超えることもあり、以前は数回だったことに比べると、たいへんなもてようです。

講義内容の準備には時間がかかりますが、受講者の満足そうなお顔とそこで得られる新たな情報や知識が、次の出前講座への原動力になっています。

写真を探しています！

資料館では、下駄屋・薪炭店・酒屋・瀬戸物屋・荒物屋等の店先の様子と働く人の様子がわかる写真、また、田畑で仕事をしている姿や子どものままごと遊びの様子等の写真を探しています。展示等で使用したいので、提供をお願いします。

編集後記

資料として寄贈したいという声がかかると、どのようなものか拝見に行きます。最近は、「生まれも育ちも豊島区。この年齢までずっと豊島区に住んでいて、つい最近ここに移ってきた」という、すでに豊島区を離れた年配の方からの電話がよくあります。郊外に独り住まいを始めたり、子どもとの同居をするためということによります。

このような転居の際、身辺の家財道具のなかに、これがひょっとして資料になるのではないか。では、縁のある豊島区の資料館に話をしようと思われる方がおられます。つい先日も、そのような電話を受け、日野市に行ってきました。

資料は、人と共に動いています。（ふ）

かたりべ
・
No.81
・
2006年3月10日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp